

②. 多木浩二『スポーツを考える』(筑摩書房、1995年)

— 身体・資本・ナショナリズム —

内海 和雄

レポートの趣旨が、内容の概略の報告であった。論点としては、エリアスとダニングの『スポーツの文明化』の方が適切と考え、ここでは著書紹介とする。

1. 内容の概略

(1) 序章 方法としてのスポーツ

・「スポーツが社会事象となり、スポーツを問うことは社会を問うことである。虚構のゲームとしてのスポーツの方が、世界化した資本主義のモデルになっていった。」

・「近代スポーツはジレ『スポーツの歴史』にある「遊戯、闘争、激しい肉体活動」という歴史貫通的規定では把握できない。ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」論で把握できる。」

・だが、「現在はエリアスをも越える問題が生じている。」

(2) 第一章 近代スポーツはなぜイギリスで生じたか

・「富めるブルジョアジーによる余暇の優雅な利用としてスポーツが発明された」だけでは不十分。エリアスの「文明化の過程」によれば、ジェントルマンが政治から余暇にいたるひろい社会領域を非暴力的なゲームにする歴史的な段階にさしかかっていたことであり、スポーツもその一環であった。」

・文明化の過程とは事件の歴史というより、18世紀には完全に姿をあらわした日常的な心性や作法の歴史であり、食事や就寝のマナー、感情や行動の変化から国家形成にいたるまでの過程を大まかに捉えるために案出された「歴史モデル」である。

・イギリスではピューリタン革命が去ってかなり経ってから、次第に支配層のあいだに暴力抜きで権力が交替する政治形態が生れ、ヨーロッパ大

陸では中世以来の騎士(武人)が専制君主の下で挺臣化するというかたちをとった。

・エリアスはスポーツを、歴史に生じてきた非暴力化(文明化)の傾向を直接、身体で表象する実践の形式と見ていた。社会の非暴力化、議会主義化、その一環にスポーツがある。

・歴史には決定論はない。(根本的に異議あり：内海)

・だが、エリアスは暴力が国家によって独占され、革命を抑制しうるシステムの確立と、それによる国内の相対的な安定化、対外的な戦争を見ていない。— エリアスの限界

・帝国主義的發展や植民地主義とスポーツ伝播は強い関係がある。

・スポーツは地域共同体からの発生、やがてネーション・ステートへ、そしてネーションを超え、脱政治化する。

・イギリスでスポーツが生ずるためのもう一つの背景として、「身体の変化」がある。ミシェル・フーコー『監獄の誕生』は権力の標的、政治技術の対象として「従順な身体」、「規律・訓練」の視点を提示している。エリアスはこれを提起していない。

(3) 第二章 近代オリンピックの政治学

・ヨーロッパにおけるオリンピック復興の背景には、一つにスポーツが一定程度普及し、教育的意義が一般化していたこと(スポーツへの情熱)、もう一つは、文化的な潮流として古代ギリシャへの憧憬がある。後者に関わって、ギリシャ時を美化し、当時の奴隷制社会の実態を隠蔽する傾向もある。

・ベルリン五輪(1936)は政治文化としてのスポーツ、メディアスポーツの始まり。前項とも関わって、ヒットラーもギリシャの末裔であることを狙った。

(4)第三章 スポーツのアメリカナイゼーション

・近代スポーツの誕生はイギリス人、社会ゲームとして国際級にしたのはフランス人、そして現代社会に相応しい文化に仕立てたのはアメリカ人
・アメリカ的スポーツの3つの特徴。①産業化し、資本主義化するにつれて広く生み出された大衆を基礎として発達した。②ビジネス化。③チーム・スポーツでありながら個人の活躍が目につく。
(典型：野球、アメフト、バスケ)

・1930年代のアメリカを典型に、危機に瀕した社会ではスポーツを安全保障に活用する。それ以降、ビジネス・ヒーロー・大衆社会・メディアの結合。

(5)第四章 スポーツの記号論

・スポーツについての記号論的分析は、簡単にいうと規則(ルール)とゲーム(身体が関わる無限の創造性を孕んだ多様化)という二つの領域に向けられる。記号論として検討する限り、もはやそれは自然に依拠するものではない。コードはゲームの持続する時間、ゲームの行われる空間の限定、選手の数、勝敗が決まる方法など、ゲームの成立と進行を決めるいっさいのものを含んでいる。どんなスポーツもコードの束である。コードを変更するとスポーツは別のスポーツを生む。(下野綱)

・コードによって社会との結び付きを強化する。コードを決めるには、なんらかの関係者の集団による合意を必要とする。この集団は当のスポーツが広がれば広がるほど公共性を拡大する。スポーツの成立には公的な制度の確立が含まれる。

(6)第五章 過剰な身体

現在の身体への問題性は以下のとおり。

・情報の視点から見る。
・記録タイプのスポーツは、つねに情報の場にある。ある記録の壁は、それを超える可能性が認識されると超えられる。

・「企業の市民性」の概念自体、企業が現在の社会文化の中で自らを正当化するために作り出した概念である。

・現在のスポーツのゲームに現れている身体は、すでに、テクノロジーを組み込んだ一種の幻覚の領域に入り込んでいる。すでに身体は明瞭な輪郭を失っている。

・フリーガン：(ダニング)メディアによって現代スポーツの経験が間接的な経験へと変質していることや、性差を力の差異と見做してきたスポーツの世界において、性差の意味がほとんど消滅しようとしていることにたいして、一部の男性中心主義者たちが攻撃的な男らしい暴力に回帰しようとしている現象だ。

・ドーピング

(7)第六章 三度目のスポーツ革命-女性の登場

・スポーツがイギリスに生れ、ついでアメリカであたらしい性格を獲得したとすると、どうやらわれわれは、今、スポーツについての認識の三度目の転換点、性差の消滅という地点に立っている。
(この認識が良く理解できない。それほど大きな事なのか！内海)

・女性スポーツを的確に位置付けることの本質は、スポーツだけを問題にすることではなく、スポーツもその一部である身体文化を新しく認識す

- ・スポーツの「進化」(ゲームとしての分岐)と「歴史」(ルール他の変化)
- ・スポーツ
 - ボール・タイプ
 - サッカー・タイプ(ラグビー、バスケット等)
 - テニス・タイプ(バレー、バドミントン等)
 - クリケット・タイプ(野球等)
 - 記録タイプ——陸上、水泳、自転車等
 - 格闘タイプ——相撲、柔道、レスリング、ボクシング等
 - 鑑賞タイプ——体操、馬術、フィギュア・スケート等
- ・スポーツは多様化、細分化、無限の増殖の可能性をもつ。

ることにある。しかし、性差を超えてスポーツを捉える言説の枠組みがまだ存在していない。

(8)第七章 スポーツの現在

・スポーツを個人の実践とみなし、それらの個人を世界中から集めて競技会を開くと仮定して見ると、ネーションなしで済ませられるか。(先程の翻では公共性である：内海)

・ネーションとは、確立された「個人」と確立された「国際機構」との媒介でしかない。重要なのは「個人」と「世界」である。これは近代的思考の極限である。(異議あり！内海、これによって、国家論や公共性を脱構築する。)

・かつての資本主義では身体は労働力であり、商品を生産してきた。この生産を中心とする段階では、スポーツは労働力の再生産のための余暇の利用法であった。だからエアラスらのスポーツ論は、つねに余暇との関係で論じられた。たしかに今でもジョギングなどに典型的にあらわれているのがレクリエーション(再生産)である。ジョギングの場合にあきらかなように、このレクリエーションには階級性が残っている。(ここまではいい、これは階級が異なる問題だ：内海)しかしすでにスポーツはそれ自体として職業化した。現代社会はそれを望んだのである。レクリエーションはスポーツのほんの一部を担うにすぎなくなった。

・スポーツとは資本主義のメタファーで語りうるものというより、その具体的な単純さによって資本主義の力の一端を示すモデルのように機能しているのかもしれない。

(9)終章 理想は遠くに

・エアラスの長所と限界。前者は「文明化の過程」で、後者では第一に国家間の暴力、すなわち戦争を議論の外に置いたこと、第二は現代社会でのスポーツ活動の過熱を促している力について考慮していない。

・スポーツは、社会的な人間活動の一部になり、その力は人々に作用して人々の集合を組み替えたり、人々にネーションの限界を超えさせたりする。社会によって形作られる面と、社会を形作る積極的な作用の面。

・現代社会ではスポーツは、その社会を構成するゲームの領域の一つになった。

・われわれは、かつてエアラスが語ったように、スポーツが理想的になんであるかを語ることはできない。それよりも夥しいメディアの言説の様態と言説の環境によってスポーツがどのようなものにされているかを、見極めねばならないところにきている。

2. レポーター(内海)のコメント

・外国文献しか列記しない。国内文献に依拠しているように見える箇所もあるが、一切無視している。不遜な態度である。だが70才の仕事としては敬服する。

・スポーツを社会活動の重要な構成要素と考え、社会との関連でスポーツを考えようとすることは評価できる。

・スポーツ専門家以外の著書であり、今何を知りたがっているのかを知る手掛かりとなる。内容的にはコンパクトに纏められているが、斬新さはあまり感じられない。

・具体的には先のコメントとして記入した。決定論ではないという歴史観や国家論の位置付けの曖昧さには賛成しかねる。機械的法則論でも困るが、歴史的法則性を否定してはまずい。法則性と偶然性の識別と統一のもとでの唯物弁証法的決定論であるべきだ。また、現在のスポーツが国家を超えた問題を多く発生させているからといって、それを即ネーションを飛ばして「個人」から「国際」へ飛躍させるのは、国家論欠如の幻想論である。

・総体として、このような試みをいかに評価したらよいか。